中学三年の指導から
――修学旅行と作文――

宮川清美

この記念誌に載せていただくには未整理でありすぎるが、やっていることを一度は先生にご報告しなければと考えてとにかく二つ。

＊

一　日時　昭和五十四年六月二十五日　午後二時五分～二時五十五分

二　対象　三年D組（四十名）

三　単元　季節感をとらえる

四　目標

1　読む範囲をひろげ、季節感が味わえるようにする。

2　見学記を書くに際して、文献にあたったり、その内容を表現に生かしたりすることができるようにする。

3　慣用語句の使い方に慣れさせ、日常語の中で使えるようにする。

4　古文に読み慣れさせ、それにうかがわれるものの見方や考え方に気づかせる。

五　研究の意図

1　生徒一人一人に課題を持たせ、それを追究させるにはどういう場を求めればよいか、修学旅行にその場を求めてみたい。

2　一人一人の作品チェックを一斉指導の中でするにはどうすればよいか。授業の複々線化の方法の一つを考えてみたい。

3　一冊の辞典を効果的に読ませる方法を考えてみたい。一つの課題のもとに読破させることができそうである。

六　指導過程・資料

1　目標・計画設定　〇・五時間

2　俳句の鑑賞　八時間

・毎日俳壇「私の俳句作法」（草間時彦）

・中等新国語（光村図書）

3　奥の細道鑑賞　四時間

・ビデオ（NHK　52年5月放映）

・「奥の細道」（角川文庫）

・録音「奥の細道」（アポロン）

4　修学旅行の課題発見　二時間

・「古寺巡礼」（和辻哲郎・岩波文庫）

・「大和古寺風物誌」（亀井勝一郎・潮文庫）

〈修学旅行実施〉

5　クイズ作り（発表は678と併行）

(1)　ことわざお国めぐり（京都）「言語生活」54年6月号

(2)　学習慣用句辞典（大村はま・三省堂）

6　作文　「旅だより」　二時間

条件　(1)(2)の慣用句を使う。

7　作文　二時間

「先人に学ぶ」

「わたしの感じたこと確かめたこと」

「奥の細道パロディ」

8　修学旅行報告会（本時）　三時間

9　単元のまとめ作成　二時間

七　活動

5の**発表**例（掲示物を作っておいてそれでクイズを出し、全員辞典を机上に用意）

ア　「目が」に続く言葉を□に入れて①～③の意味となるようにせよ。

「目が□」

①　注意がゆき届くこと。

②　鑑識力がすぐれていること。

③　非常に好きであること。

イ　次の□の中に、体の部分にあたる一語をそれぞれ入れて慣用句を完成せよ。また、その意味にあたるものを左から選べ。

(1)　□に角を立てる。

(2)　□持ちがならない。

(3)　□にきぬを着せない。

(4)　□がすわる。

(5)　□で風を切る。

A　おちついた様子。

B　おこるということ。

C　思ったとおり、大胆にはっきりいうこと。

D　がまんできないこと。

E　元気よく、はつらつとしている様子。

6の「**旅だより**」例

友人へ

今年もまた、うっとうしい梅雨の季節に入りましたが、いかがお過ごしですか。私は、十三日から十八日まで修学旅行で京都と奈良へ行って参りました。石川さんは、すでに、古都へいらっしゃったことがあるでしょう。しかし、私は初めてですから、前日まであこがれと期待で心は高ぶっていました。実際に訪ねてみて、どこも私の予想以上の美を誇っていましたが、その中でも特に印象深く残っている所を今からしたためたいと思います。

三日目、午前中に嵯峨野を歩き、滝口寺を訪ねました。この寺が、平家物語で知られている横笛と滝口入道の悲恋で有名だということは、あなたもご存知のことと思います。なるほど、お寺の中に入って見ると、仏壇に横笛と滝口入道の木像が置かれていました。じっと見つめていると、自然に手を合わせたくなるような悲しさ、何とも言い表し難い寂しさをお顔に浮かべておられます。そこで説明がありました。ひっそりと静まり返ったお寺の中で、そのおばあさんの哀愁のこもった京都弁。そのムードは、あなたにも察していただけると思います。それはあたかも、天から舞い降りてきた天女

が、長い衣をまといながら、寂しそうにほほえみ、語っているかのようでした。そんな、私の心をひいた京都弁が高級な文学をよりいっそう高級にしていました。甘いロマンの香りの漂う滝口寺。いつかきっと、一人で訪ねたいと思っています。

次に、滝口寺のすぐ近くにある祇王寺へ行きましたが、そこの吉野窓の美しさといったら、とうてい書き表すことはできません。私が行ったときは、雨上がりではありませんでしたので、淡い緑色が、うっすらと映っていただけですが、雨の上がった後は、七色の虹のようになるそうです。

ここのお寺もまた、平家物語で有名な祇王・祇女がまつられていますが、私が驚いたことは、祇王の恋敵、仏御前も一緒にまつられてあったことです。平清盛のお気に入りの白拍子であった祇王ですが、突然十六歳のまだ若い仏御前が現れ、清盛の心はあっという間にそちらへ移ってしまい、祇王を追い出してしまうのでした。

（引用中略）

昔の女性はこんなにもきっぱりと世を捨てる精神をそなえていたのかと思うと、現代人の私は、少し恥ずかしい感じがしないでもありません。一つのことを決心する意志の強さには、つくづく感心させられました。平家物語のこの祇王の部分を思い出しながら、うしろ髪を引かれる思いで去りました。

石川さんも、嵯峨野の美をたたえておられるのなら、ご感想などを教えてくださいませんか。古都を愛する心は、私もあなたも変わることはないでしょう。では、おたよりお待ちしております。お体に気をつけて。

さようなら

六月十六日

石川文子様

岡田　美和

7の「先人に学ぶ」例

先人に学ぶ

――法隆寺南大門・百済観音――

眼前には、すでに南大門がせまっていた。そして門をくぐろうとしたとき、ふと足がとまった。「南大門の前に立つと、もう古寺の気分が全身を浸してしまう。」という和辻さんの文章を、急に思い出したのである。まさにそのとおりだ。私は「がさつで落ち着きがない。」と人からよく言われるが、そういう自分に似合わず、古寺を訪れるのが好きだという趣味を持っている。そのため、よく鎌倉にも行くのだが、いつも寺の門をくぐるときの感じが、うまく表現できなかったのである。たしかに、いつもの感情とはちがう、いつもの自分とはちがうと思わせる何かがあるのだが。しかし、今やっと気づいたのだ。あのなにげない、文章に書けば、ほんの一、二行の言葉が、こんなにも自分の感情を、うまく表現できるのだということに。新たなる発見である。そして、その感動に胸をおどらせながら、さらに足をすすめて行った。

歩きながら、さっきの言葉がどうしても頭から離れずこまっていた。しかし、そのなやみもすぐに消えた。その、あのいちばん期待の百済観音像が解決してくれたのである。又、「なんてかびくさい室内であろう。」という不満を感じたのもつかの間、自分のすべての感情と思考が、この像にうばわれたのである。大ざっぱでありな

がら、微細な感覚を欠いているわけではない。何か、神秘的なものをただよわせる微かなわらい。どこともなく、気持悪ささえも伴っているが、これから感ずるものは、慈愛というほか言い表しようのないことだけは確かである。それしか頭に浮かばない。

ふと我に返ると、あたりにはだれもいない。遠くで友の声がしている。かたずをのんで見入っているうちに、おいていかれてしまったようである。

しかたなしに、百済観音から目をそらせ、歩き始めたものの、頭からあの微笑を消すことは、どうしてもできなかった。

7の「**わたしの感じたこと確かめたこと**」例

事実、私は今少し落胆しています。修学旅行へ行く前、「古寺巡礼」に書かれてあった法隆寺の「サァー」とした感じを一度でもいいから味わってみたい、和辻さんと同じ純粋な心を自分が持っているかを確かめてみたいと思っていました。でも法隆寺へ行ってみてがっかり、全然そんな気がしないのです。中門から入れなかったせいもあるでしょうが、やはり、自分の心は和辻さんのように純粋ではないんだなあと思い、そのときはかなり落胆しました。

次の日、嵯峨野へ行きました。嵯峨野はいいと、どの人も相場が決まったようにいうけれども、私はそんなことを言われている嵯峨野というところをとてもうすっぺらいもののように思っていました。念仏寺、祇王寺はそれほどでもなかったのですが、滝口寺へ入って正座してみたとき、とっても驚きました。なんといったらいいのでしょうか。妙な気持ちがこみ上げてきました。おばさんの流暢な京ことばと前に安置されてある仏像をいっしょに見聞きしているうちに、涙が思わず出てきそうになりました。感激！なんてすばらしいんだろう。そう感じてうれしくなりました。嵯峨野を色めがねでみてしまったことを、とても恥ずかしく思いました。

今、なぜ落胆しているかとかというと、やはり法隆寺のことです。でも滝口寺の感激が心に残って修学旅行は、とても収穫があったと思います。

7　「**奥の細道**」**パロディ**例

平等院――立石寺にならって――

宇治の地に平等院という寺院あり。関白頼通公の開基にして、特に清閑の地なり。一見すべきよし、人々の勧むるによりて、奈良へ向かふ途中、立ち寄りにけり。雨かすかに降り続く中、阿弥陀堂を拝観す。棟に一対の鳳凰を上げたれば、人、鳳凰堂と呼びにけり。蓮弁四重に重ねて蓮台とし、静かに座し給ふは阿弥陀如来なり。仏師定朝の作とぞいいにける。周囲をめぐる雲中の供養菩薩奏楽舞踏をたしなみ、壁画剝落変色すといへども、極楽浄土の面影をぞ今に伝へける。阿字池を巡り、堂も正面より拝し、重き歴史鐘楼の鐘に響き、風かすかに吹きわたりければ、佳景寂寞として心澄みゆくのみおぼゆ。

8　**修学旅行報告会**

各人、一つだけ、「旅だより」「先人に学ぶ」「わたしの感じたこと確かめたこと」の中から選んで、全員に発表させた。そのとき

の記録は次のようにとらせた。

旅だよりA　先人に学ぶB　感じたことC

記録（　　）

だれ（何）	資料	慣用語	内容	とらえ方
1				
2				

記録の一部（「P」とあるのは、「学習慣用句辞典」に出ているページを示す。）

14勝岡C

＜資料＞なし

＜慣用語＞あとの祭（P．13）けがの功名（P．79）

＜内容＞　友情をあらためて知った。

＜とらえ方＞友達のやさしさをよく書いている。

15石井A

＜資料＞平家物語

＜慣用語＞脚光をあびる（P．72）

＜内容＞大原の里、寂光院の歴史

＜とらえ方＞タイムマシーンに乗ったような感じ方をさせてくれる。

16鳥羽A

＜資料＞なし

＜慣用語＞息をころす（P．20）息をのむ（P．21）堂に入る（P．116）

＜内容＞ガイドさんへの感謝

＜とらえ方＞慣用語の豊富な使い方

17桧山C

＜資料＞ひとすじの道

＜慣用語＞右に出る（P．152）

＜内容＞滝口入道と横笛の悲恋

＜とらえ方＞滝口寺の悲しいムードがよく出ている。

18渡辺B

＜資料＞つれづれ草

＜慣用語＞身につまされる（P．158）

＜内容＞人生の無常

＜とらえ方＞つれづれ草を引用して念仏寺を語り、改めて古典の魅力を知らせてくれた。

発表のあとの相互感想

清田　資料の生かし方では、石井君の平家物語を引用したところがいいと思いました。あとはほかにも桧山君の「ひとすじの道」を引用したところや、渡辺信吾君の「つれづれ草」を引用したり、あと「古寺巡礼」を引用した人もいました。

とらえ方の独自さでよかったのは、土屋君の「古寺巡礼」を引

用しながら、和辻さんの言っているところを自分なりに違う表現で言い表しているところがおもしろいと思いました。あと、内容では、尾崎君の建物や仏像などを観察しそれをうまく表現しているところがいいと思いました。

小池　資料の生かし方では渡辺信吾君の、古典を使いながら、それを訳して説明しているところがいいと思います。

それから、勝岡君の慣用語句の使い方がいいと思いました。とらえ方や表現などでは、呼びかけの表現を使った岡田さんのが印象に残りました。

石川　とらえ方としては鳥羽君と桧山君と岡田さんがポイントをしぼって自分の考えをのべているところがいい。栗林君の展開の順序がリズムがあってよかったし、表現のしかたで「カメラのファインダーにおさまる」という新しい表現で狭さを表現しているのがおもしろいと思いました。それから、尾崎君のには幼いときと今との感じたことの対比が入っていておもしろいと思いました。

玉置　皆は見学先の感想が多かったのですが勝岡君だけが宿舎の生活で友情をとりあげたのは、よかったと思います。

9　単元のまとめ

〈表紙〉

昭和五十四年五月二十日 ～ 七月二日

春　夏　秋　冬

（古　典）

確認

三年D組　岡田美和

右の左上の「確認」の説明

確認表（○×記入）

順序はイに示されたようになっている	
反省には①②③④が書いてある。	
目次が作ってあり、ページ・ナンバーが打ってある。	

イとあるのは、毎週土曜日に生徒に渡すプリント（国語教室通信）の中の「単元のまとめ」の作り方に示した項目。

ア　サブタイトルは「古典」

イ　順序は日記のときと同じ。

1　表紙（サインペンで）メインタイトルは工夫して。
2　序（シート一枚）
3　目次（内容項目とそれのページを書く）
4　反省
5　5以下は各自の工夫

ウ　反省の観点

学習目標と照応させ、各自で考えるが、次は必ずたてる。

①　音読を家でどのくらいしてみたか。
②　暗唱の努力はどのくらいしたか。
③　友達の発表を聞いて自分の発表についてどう考えたか。
④　読書はどうであったか。

〈序〉

私たちは、古典の学習で、日本人の鋭い季節感を学びました。日本は他の国々と違って、四季の区別がはっきりあります。清少納言が枕草子に書いているように四季それぞれ趣が異なっています。昔の人々はその移り変わりを鋭敏にとらえ、文にし歌にしました。その心は今の人々にも同じく受けつがれています。

このような春夏秋冬は、わが国にとって誇りとするものだと思います。私もこれを機会に、春、夏、秋、冬をもっともっと鋭く見つめたいと思い、「春夏秋冬」のメインタイトルにしました。

なお、このまとめの作成に要した時間は四時間です。

〈反省〉

・音読を家でどのくらいしてみたか。

私が好きな古典なので、国語の授業のある日は、いつも復習の意味も兼ねて三十五分ぐらい音読をした。そのせいか、初めて習う文章なども、去年よりすらすらと読めた。

・通信を手にして

国語教室通信が発行される土曜日を毎週楽しみにしているので、書かれていることは、全部実行したつもりだ。それによって、今、自分は計画性をもって、国語を勉強しているのだという自覚がもてた。

（以下略）

＊

一　日時　昭和五十四年十月十九日　一時五分〜二時五十五分
二　対象　三年D組（四十名）
三　単元　美しい言葉とは
四　目標

1　自分たちの作品の載っている文集を読んで、友達の作文に学ばせ、自分の今後の努力することを明らかにさせる。
2　詩人の言葉の感覚に触れさせ、言語表現における創造について考えさせ、今後の自分にとっての課題を持たせる。

五　研究の意図

1　必要感に迫られた学習の場を設定したい。（修学旅行文集を後輩に読んでもらうとなると、その中の自分の作文についても、修学旅行についても一言書き添えたくなるであろう。）
2　先輩との比較ということが学習意欲を高めるのであろう。同じ見学場所もあるから、いろいろな観点で気づくことがあろう。
3　相互啓発の活発な場を作りたい。（相手をきめて手紙を書か

せてみる。自分にないものがある作品を発見させる。いつもの仲間うちのなれあいにとどまらないようにしたいから、選ぶのは、男子から一点、女子から一点とし、それも自分のクラス以外からとする。）

4　新しい文集ができて生徒に届いたときの心のたかまりを学習に発展させていきたい。

六　指導過程

1　目標・計画設定　　〇・五時間

2　「美しい言葉とは」（茨木のり子）を読んで美しい言葉について考える。　　二時間

3　修学旅行文集（各自の作品が一ページ千五百字分載っている）を読んで、手紙を書き添える。　　三時間

4　手紙の交換をして読む。（本時）　　一時間

5　「私の美しい言葉」（詞華集）を作る。
　中心資料「現代名詩選」（新潮文庫）「白い本」（二見書房）を使って　　五時間

6　5の作品を読み合い、感想をしおりに書いて作品にはさむ。　　一時間

七　活動

3の手紙例　（後輩へ）

日本人の信仰と自然との調和を発見し、その心に近づく。これは自分にとってのこの旅の大きな目的でした。そして、それを感じることのできたのが、京都の大原と嵯峨野です。

大原は自然と人々の生活が溶け合い、飾り気のない美しさを醸し出している所です。そのなかにある三千院と寂光院。三千院の阿弥陀三尊は、しんみりとした感じの御仏です。庭園の新緑もまたすばらしいものです。「いたるところにしみついているうらがなしさ」と、ある先輩が言い表した寂光院。ユキノシタの小さな白い花と沈黙がよく似合う寺です。人々の生活と自然と仏とが一体化した里。大原とはそういうところです。

嵯峨野は、化野念仏寺の無縁仏、祇王寺、滝口寺と、人生のはかなさ、人の無常を感じさせる寺が続きます。そして、このしっとり落ち着いた土地には、なにか親しみのような、あるいは、懐しさのようなものが感じられます。本村さん（167ページ）のように、いっだったか、一人でこの道を歩いたようなそんな気がする所、それが嵯峨野なのです。

大原・嵯峨野について、なんとなくわかっていただけたでしょうか。この文集では、自分としては大原を、なかでも三千院を中心に書きましたが、阿弥陀三尊との対面について、うまく表現できなかったのが残念です。「発見」がなかったからではないかと残念に思います。

なお、嵯峨野については、鶴岡君（109ページ）の「化野から嵯峨野へ」、またこれらの寺々とともに伝わる人々については、小野部さん（206ページ）の「先人に学ぶ」によく書かれていると思います。是非読んでみてください。

（友達へ）

「あの静けさ、それは京都にしかないものだ……。」という書出しが我々読み手の心をひきつける。読んでいくうちに、洛北にいる

ような気持ちになるのは不思議だ。きみのよい点をあげてみたい。
まず表現が巧みである。「雨のまくにおおわれ」や「それにもまさる静けさが洛北にはあった」などという表現は私はとうてい使えないものである。
第二に文末の変化がすばらしい。この変化が私の心を洛北に連れていってくれているようである。また所々で使う体言止め、これは文を引き締める。
私はきみの文章を読んで三千院・寂光院を鮮かに思い出した。私がきみの文章を読まなかったら、こんなには鮮かな大原を思い出しはしなかっただろう。そのようなことから、きみの「静かなる洛北を訪ねて」には四か月前の感動をよみがえらせる「もの」があるのだ。

（友達へ）

平井さんの作文は、表現が豊かで、かつ、ユーモアな面もあるという点で、私が学ぶべき要素はほとんど持ちあわせています。まず、書き出しの部分で「こんにちは」としたことは、変によそよそしくなく、お兄様あての手紙らしく聞こえ、純粋でいいと思います。また「手紙ぎらいの麻里子がなあ……。」というお兄様がたぶん思うような言葉を書いたのも、平井さんの文章全体を明るく輝かしていると思います。ユーモアな面はまだあります。三千院のお坊さんへの自分の気持ちを素直に書いているところです。このようなことを考えると、今、また改めて私の劣っている点を痛感せざるを得なくなりました。
次に、表現の上では、大原の里の〝里のかおり〟の部分に感心させられました。「みずみずしい若葉をたたえ、訪れる者の心に語りかけ、まるで心を純粋にすみきらせる力を持った妖精のようにさえ感じられるのです。」というところや、「まるでベールのようなことけが……」などは、私には、到底表現できません。
これからは、平井さんの作文に習って、自分の文章表現を工夫しなければならないとつくづく思いました。

5の**詞華集**例

。「私の美しい言葉」（詞華集）につけた書名――足跡
。序　「足跡」を辞書で調べると、その中に〝残した業績〟という意味が書いてありました。そのとき、〝白い本〟のタイトルはこれ以外にないと思ったのです。これを十年後、二十年後に見るときの気持ちは、まさに自分の歩いた後につく足跡を眺めるような心境であろうと思ったからです。また、業績とまでは言えなくても、中学三年で学習したことがらが、自分の言葉として書いてある本だからです。
そのようなことから、初めての制作の白い本のタイトルに「足跡」を選びました。なお、内容の配列は、抜粋文の作品名の五十音順にしました。見開きで一組とし、右ページには抜粋文とその出典を、左ページにはその抜粋文に茨木さんの考えをあてはめた感想（朱書き）と私自分の感想（青書き）を書きました。
。目次

秋の歌……10　朝めし……12
一握の砂……16　大阿蘇……18
落葉松……22　汽車に乗って……24

。本文（88ページ）

全部が愛情の対象あって励むように。

「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」石垣りん（中等新国語P145）

（89ページ）

何とあたたかい心構えだろう。私もこのような女性でありたい。

これは、茨木のり子さんの「いつまでも忘れられない言葉」という。

。あとがき

〝白い本〟以前から書店で見かけた本でした。私の一つの夢がかなったのです。

あの真白なページに自筆によって書かれた本が出来上がるのをどれほど待ちこがれていたことか。

次に反省をあげておきます。

第一に、資料の整理がきちんとゆきわたっていなかったため「冬の虹」を入れるのを忘れてしまった。

第二に万年筆とボールペンで書くので、一度書いたことは消せないということによる失敗があった。序の最初の一行を一字下げにし忘れて、それはそのままになってしまった。これで、序を読んだだけで読者は失望することだろう

（以下略）

6のしおり例

A　この言葉は私も気に入ってしまった。ほんとうに勇気を与えてくれるような言葉です。あえてこのページにこのしおりをはさみましたが、この本すべてが私よりすぐれていると思います。

B　題名が思慮深い言葉だと思いました。選ばれている言葉が、詩、小説、それも外国の作品にも及ぶ、私の読んだこともない本が幾つもあって、すっかり感心してしまいました。

（以下略）

三月十九日に三年間ともに歩んだ生徒を送り出した。以上は、その生徒との五十四年度の学習である。この学習をとおして、確かめたことの主なものは次のとおりである。

ア　一人一人に独自のものが作り上げられたり発表できたりするようにする。

イ　友達の発表を聞く時間を惜しまず用意し、聞いた感想をメモさせたり、読ませたりして相互啓発を図る。

ウ　指導過程において、個別指導、個別チェックを入念にする。

エ　自己評価の観点を示し、それに基づく評価ができる場と時間をとる。

オ　それまでの自分を乗りこえるための資料利用を課し、評価に当たってはその観点を入れる。

卒業時、私の指導について「教えこむという単刀直入のほうが自分の性に合っているのだが」という声があった。これをどう消化して新一年を迎えるかが私の一つの課題である。

（東京都千代田区立今川中学校教諭）